

本誌は、県民の皆様に山梨県子ども読書支援センターのことをより深く知っていただくため、当センターの事業や活動内容について情報発信するものです。

>> 中堅図書館職員向けの「児童青少年サービス講座(中級編)」(第1回、第2回)を実施しました。

平成25年7月10日(水)に「絵本を選ぶ、絵本を届ける—東京子ども図書館の実践から」と題して張替恵子氏・護得久えみ子氏(公益財団法人東京子ども図書館)による講義があり、43名が参加しました。東京子ども図書館の実践、選書やブックリスト編纂等についてお話がありました。ブックトークの実演もしていただきました。

また、7月31日(水)に「子どもの本は世界への応答—外国の児童文学をどう読むか」と題して早川敦子氏(津田塾大学教授)による講義があり、46名が参加しました。外国の児童文学や国際アンデルセン賞について、また実際の資料を例に挙げながら21世紀の課題についてお話がありました。



>> 7月～8月の子ども読書支援センター事業関連の問い合わせ及び職場見学件数

7月～8月に窓口または電話等で問い合わせのあった件数は次の通りです。

合計 64件 内訳…7月:24件 8月:40件

また、7月～8月の職場見学数は9件でした。

>> 6月～8月の講師派遣状況

- ・6月13日(木) 北都留地区学校図書館教育研究会(大月市民会館)
テーマ「育てよう。読む力、読みたい気持ち。」
- ・7月23日(火) 平成25年度第2回東部班学校司書部研究会(中央市立田富南小学校図書室)
テーマ「科学絵本の楽しみ・読書が苦手な児童への働きかけについて」
- ・7月30日(月) 平成25年度山梨県学校図書館教育研究会夏季研修会第3分科会(ぴゅあ総合)
テーマ「選書と展示」
- ・8月16日(金) 2013年度峡南教育研究協議会図書教育研究会(富士川町民図書館)
テーマ「子どもの読書の実態、家庭読書の啓蒙等」
- ・8月23日(金) 平成25年度学校図書館教育研修会(山梨県総合教育センター)
テーマ「読書指導の理論と実践」(小学校レベル・中学高校レベル)

>> 布絵本の貸出を開始しました。



障害のある子どものために作られた布絵本(公益財団法人「ふきのとう文庫」製作)を所蔵しています。利用を希望される方は、1階児童カウンターで手続きをお願いします。

*事前に利用登録が必要です。

*インターネットからの予約は受け付けておりません。

*どんな資料があるか当館ウェブサイトから確認できます。

「県立図書館所蔵のバリアフリー絵本と参考文献リスト」

http://www.lib.pref.yamanashi.jp/kodomo_shien/shien_list.html

>> 平成22年度～平成24年度「子どもの読書活動指導者養成講座」報告(2)

過去3年間に実施した研修の概要を、3回にわたって報告していきます。今回はその2回目です。

県内の子どもの読書活動に携わる方を対象に、指導者的役割を担う人材を育成するため、平成22年度から3ヵ年計画で、1年目は子どもへの読み聞かせ・おはなし等を実

践するボランティア活動の経験者、2年目は図書館職員、3年目は幼稚園・保育園等職員を研修対象とし、読書活動の専門知識及び実技を学ぶ研修を実施しました。

物語が見えてくるように書くこと。「書評はその本との闘いでもある」という。

文体や表現に注意すること、訳者・装丁・挿絵等にも目を向けること等、書評に必要な条件について触れられた。注意点として、本から出た言葉か確認しながら書くこと、子どもの視点で書くこと等を挙げ、「その本を読んでいない人が書評を読んで本が見えるか」が一番大事だとまとめられた。文章の書き方で一般的に大切なことについてもお話があった。

その後、事前課題であった3冊の本の解題の検討を行った。

『ねずみ女房』(ルーマー・ゴッデン著、石井桃子訳、福音館書店、1977年)

『カイウスはばかだ』(ヘンリー・ウィンターフェルト作、関楠生訳、岩波書店、2011年)

『ヒラー・ユージェントの若者たち』(S.C.パートレッティ著、林田康一訳、あすなろ書房、2010年)

質疑応答では、出た質問に対して紹介文に本の調子や雰囲気を表すことの大事さ、書評と解題の違い等についてお話があった。

参考資料

『生きなおす、ことば 書くことのちから』

(大沢敏郎著、太郎次郎社エディタス、2003年)

『子どもと本をつなぐあなたへ』(東京子ども図書館、2008年)

【第3回】

日時:平成23年10月20日(木) 午後1時半～4時半

会場:ぴゅあ総合 参加者:36名

講義「児童サービスの実際2 ブックトーク」

杉浦弘美氏(横浜市金沢図書館)

ブックトークを知り、現場で取り組むまでのご自分の経験からお話いただいた。ブックトークは現在たくさん本が出ているが広まったのは1960年代から。ブックトークは、誰かが子ども達に実演しているところを見ること、自分が実演してみることも、また自分からそういう場を作ることが大事とのことだった。

そして、小学校3・4年生あるいは初めての子ども向けのブックトーク「こんなことあるかな」、中学生向けのブックトーク「楽器のいろいろ*本の中で」の実演を見せていただき、ポイントを解説していただいた。

現場で実際どうなのかということで、実践している受講者から話を聞き情報交換が行われた。学校図書館は子どもとの関わりが多いので、オリエンテーションでのブックトーク、特に分類を説明する時に該当する分類の本を紹介すると印象深いということだった。また、色々な場で本を紹介していくことの大切さについてもお話があった。

大事なのは本をどうやって手渡すか。客観的になり過ぎず語り手の気持ちを伝えることが大事だとまとめられた。

質疑応答では、紹介した本の用意や、本と本のつながり方等について質問があった。

参考/紹介資料

『ブックトーク入門』(教育史料出版会 1986年)

渡辺茂男「ブックトークと実際」

『学校図書館』1959年11月号 通巻109号 p.23-25

平成23年度 講座内容

【第1回】

日時:平成23年7月29日(金) 午後1時半～4時半

場所:甲府市立図書館 参加者:73名

図書館職員サービス講座と合同で実施した。はじめに開講式が行われ、山梨県立図書館長の挨拶と講座オリエンテーション、子ども読書支援センターの役割の説明、担当職員の紹介があった。

講演「市町村と学校図書館の連携」

中村伸子氏(袖ヶ浦市学校図書館支援センター)

学校図書館をいきいきさせ、学校図書館の機能を果たすための連携についてお話いただいた。

学校図書館の機能は、豊かな感性や情操、思いやりの心をはぐくむ読書センターであると同時に、主体的・意欲的な学習態度、自ら学ぶ力、情報活用能力を育てる学習情報センターでもある。2つの機能を両輪と考えると運営していくことについてお話があった。

次に、開設当初からの袖ヶ浦市学校図書館支援センターの具体的な内容を伺った。

続いて、調べ学習への対応について。平成10年、文部省「図書館情報化活性化推進モデル地域事業」の指定を受けた際のお話や、先生方に学校図書館を利用してもらうための実践例を紹介していただいた。調べ学習相談会や、百科事典出前授業、博物館との連携等、様々な取り組みをされているということだった。

また、学校図書館をめぐる司書教諭と学校司書、教科・学級担任、学校図書館支援センターの関わり方、役割分担について伺った。

実際の取り組みから、人・もの・情報がつながりあって、読書教育、学校図書館の運営が可能になると示し、重要なのは人・もの・情報・地域の連携を学校図書館支援センターがコーディネートすることだとまとめられた。

質疑応答では、学校支援センターの運営や教材の詳細、博物館キットや調べ学習相談会の実務について質問があった。

【第2回】

日時:平成23年9月6日(火) 午後1時半～4時半

会場:山梨県立文学館 参加者:34名

講義「児童サービスの実際1 書評と解題の書き方」

飯野真帆子氏(公益財団法人東京子ども図書館)

事前課題として大人向けの解題作成が出されていた。今回は書評と解題の基本的な書き方を具体的に話し、その後課題について検討した。

はじめに、「本を批評し、紹介する」書評について、優れた書評の条件を示された。図書館員の書く書評の場合、更に客観的に本を指し示す必要があり、子どもの立場に立って読むことと、子どもに勧めたいという思いが伝わるかどうか大事とのことだった。

次に、書き方についてポイントを説明された。まず選書に当たっては良い本をたくさん読み、本の質を見極められるようにしておくこと。書くに当たっては、先入観を持たずに、思い切り楽しんで読み、その本に愛を持つこと、客観的に

【第4回】

日時:平成23年11月16日(水) 午後1時半～4時半
場所:山梨県立青少年センター 参加者:27名

講義「図書館利用に障害のある子どもたちへ」 山内薫氏(墨田区立あずま図書館)

「障害者サービス」の障害者＝心身障害者ではなく、図書館利用に障害のある人へのサービスという前提でのお話。

国際障害分類初版 ICIDH(1980)では、一般的に言う「障害」は第一次と第二次段階(“個人モデル”)だったが、その後「社会側に問題がある」という考え方が一般的になった(“社会モデル”)。そういった意味で図書館は障害に対する考え方が先駆的だったという。ちなみに、障害者権利条約が2006年に採択されたが、日本は国内法未整備のためまだ批准していない。

次に、物理・制度的障害、情報摂取・利用できない障害、コミュニケーションの障害など、障害の種類について説明があった。“Special needs”と呼ばれる人々など、LDといっても様々な方がいるとのことだった。また、日本では自治体内にある矯正施設へのサービスをしている図書館が少ないという。

布絵本、点字図書、さわる絵本、バリアフリー絵本、大活字本、京都点友会の弱視の子ども向け日本地図等の紹介があった。

最後に、墨田区立図書館の取組を紹介していただいた。

質疑応答では、まずどんなことからサービスを始めればいいのか、また他機関との協力体制について質問があった。

参考/紹介資料

『いま図書館では』(森崎震二/編著、草土文化、1980年)
『星の王子さま』(どらねこ工房、1978年)

【第5回】

日時:平成23年12月15日(木)
午後1時半～4時40分
場所:山梨県立青少年センター 参加者:31名

講義「選書と蔵書構成 子どもと本を結ぶ司書の役割」 伊藤明美氏(浦安市立中央図書館)

選書の意味と、蔵書構成との関係、実際に選ぶ方法についてお話があった。

はじめに、選書の意味について。最も基本的な仕事であり、それゆえに難しい。リクエストに応えることと予算のバランスを取りつつ、個人の目ではなく図書館員として選ぶことが大事とのことだった。また、浦安市立図書館のサービスを通して、選書・蔵書構成・サービスは一体であることをお話いただいた。

次に、選書と蔵書構成について。基本的な本は絶対に必要とのことだった。子どもの本は渡し手が必要で、図書館の人への信頼が本への信頼につながるため、きちんと手渡せば次の本に向かってもらえるという。選んだ本が生きる棚とはどういうものか、質から見た蔵書構成と、量(冊数)から見た蔵書構成のお話があった。本は棚の7割ぐらいの量にしておく等の留意点を挙げられた。

続いて、良い本を選ぶ方法について。良い本と言われているものをたくさん読み、自分の中に新しい本に対するものさしを作ること、迷ったら少し時間をおくことも必要だということだった。また、どう利用されるか、誰に読んでもらうかが具体的にわかると、選び方が変わってくるという。選書においても PLAN DO SEE は重要ということだった。

その後、選書の演習を行った。6人が1グループになり、各グループに1冊ずつ手渡された絵本を購入するかどうか検討した。絵に対する評価、子どもが読んでもらって理解できる本とはどういうものか等、ポイントをおさえながら各グループで話し合った。

最後に、「言葉で書いてみる」「他の本と比較する」「何となく選ぶのはやめる」といった、評価する際の注意点を教えていただいた。

参考・紹介資料

『私たちの選んだ子どもの本』(東京子ども図書館、1991年)
『児童文学論』(リアン・H. スミス/著、岩波書店、1964年)

